

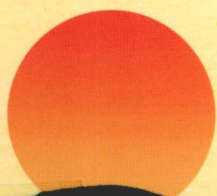


北京日本学研究中心



日本学研究

二十二



学苑出版社



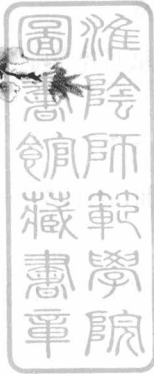
1474887



北京日本学研究中心

日本学研究

二十二



淮阴师范学院图书馆 1474887

學苑出版社



7884741

图书在版编目 (CIP) 数据

日本学研究. 第22辑/北京日本学研究中心编. —北京:
学苑出版社, 2012. 10

ISBN 978 - 7 - 5077 - 4131 - 5

I. ①日… II. ①北… III. ①日本—研究—丛刊
IV. ①K313.07 - 55

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2012) 第 248257 号

责任编辑: 韩继忠

出版发行: 学苑出版社

社 址: 北京市丰台区南方庄2号院1号楼

邮政编码: 100079

网 址: www.book001.com

电子邮箱: xueyuan@public.bta.net.cn

销售电话: 010 - 67675512、67678944、67601101 (邮购)

经 销: 新华书店

印 刷 厂: 永恒印刷有限公司

开本尺寸: 787 毫米 × 1092 毫米 1/16

印 张: 29

字 数: 600 千字

版 次: 2012 年 10 月第 1 版

印 次: 2012 年 10 月第 1 次印刷

定 价: 100.00 元

版权所有 翻印必究

如发现质量问题, 请直接与发行部联系调换

主 编 徐一平 笠原清志

编 委 譙 燕 朱桂荣 秦 刚 潘 蕾

周维宏 葛东升

执行主编 周维宏

前 言

今年是中日邦交正常化 40 周年,作为中日政府合作事业的北京日本学研究中心继五个五年合作计划、一个三年合作计划后,即将进入中日之间的第二个三年合作计划。在日本国际交流基金的继续资助下,今年我们编辑出版了《日本学研究》第 22 期。

作为北京日本学研究中心的学术年刊,我们主要发表中心教师和学生的部分年度学术研究成果,今年有 5 位教师和 8 位在读博士生的论文入选,同时按惯例还入选了今年毕业的中心硕士生的 5 篇优秀论文。此外我们还向国内外的日本研究界广泛征稿,今年共收到了 22 篇投稿。经过各专业研究室的审查,共有 16 篇外部论文被采用。

在除优秀硕士论文之外的全部内外投稿中,专业分布是:语言研究 16 篇、语言教育研究 6 篇、文学研究 12 篇、文化研究 3 篇和社会研究 2 篇。文化和社会方向的投稿偏少。从今年开始,经济专业从社会经济专业中独立出来,我们将形成语言研究、语言教育研究、文学研究、文化研究、社会研究和经济研究六个专业方向。我们需要加强对日本经济的研究、增加日本经济方向的论文征集。

在审稿程序上,编辑委员会今年进一步进行了规范,制定了新的审稿流程,对需要修改的论文,由各专业研究室审稿教师进行了修改确认。对于一部分需要修改后再审的稿件,鉴于时间的因素,不得不暂时割爱,寄希望于下期投稿优先处理。

本期发表的所有论文,既展示了中心和国内日本学界的部分最新研究成果,也反映了今后我们需要更加努力的方向。我们希望通过本期论文的出版,进一步加强中心和国内外日本研究界的交流,大家齐心协力,共同促进中国日本研究水平的不断提升。

北京日本学研究中心
《日本学研究》第 22 期编辑委员会
2012 年 7 月 17 日

目 录

日语研究

- 間投助詞「ね」の待遇性に関する一考察 顔晓冬(1)
- 作文データにおける否定「ない」の習得についての考察 馮寶珠(12)
- 关于日语提示助词「ばかり」的语义扩张机制的考察 李占军(24)
- 日本の広告コピーにおける前提の機能について 卢永妮 宫 琳(33)
- SRE 理論による日本語テンス・アスペクトの一試論 崔亜珍(47)
- 限定提示助词的层次结构
- 南不二男层次结构理论的应用及展开 曹彦琳(62)
- 中国人日本語学習者のための中日漢字音対照研究 薛華民(71)
- コーパスに基づく多義語「甘い」の意味再分類及び語義分布調査 姜 紅(83)
- 《时务报》(1896~98)中的日语借词
- 三字词与四字词部分 朱京伟(94)
- 日语「ところ」和汉语“所”之本义考 陈燕青(106)
- 日语外来形容词的意义用法及与原词的关系 譙 燕(117)
- 当代女性语的中日对比研究
- 以词汇为中心 张 雪(125)
- 若者言葉の体系性に関する一考察 罗泽宇(134)
- 关联理论视角下中日听话者对幽默话语的认知图式分析 梁 爽(149)

日语教育研究

- 中国人日本語学習者の「話す」技能に関する自己評価
 —— Can-do-statementsを利用して …………… 張 毅(161)
- 日本語学習者の概念的流暢性(CF)の発達に関する考察
 ——メタフォリカル・コンピテンスに注目して …………… 鐘 勇(172)
- 中国の日本語会話教科書における相づちの扱いについて
 ——コミュニケーション能力養成の観点から …………… 张金龙 李友敏(185)

日本文学研究

- 和泉式部の和歌における身体表現 …………… 張龍妹(201)
- 对《宇津保物語》中“仲忠孝悌”的考察 …………… 赵俊槐(209)
- 入唐僧と隱逸文学
 ——受容と超克 …………… 田云明(220)
- 近代中国文壇に映された漱石の遠景 …………… 張杭萍(233)
- 夏目漱石の新闻记者観
 ——以《从此以后》为中心 …………… 高西峰(245)
- 错位的母女关系
 ——《香华》中的女性形象 …………… 杨珍珍(255)
- 欲望する/される女たち
 ——「空薰」と「そら^{そらだき}炷^{だき}続編」論 …………… 韓 韓(264)

日本文化研究

- 公共哲学与东亚研究
 ——中、日、韩之间的对话 …………… 张彦丽(277)
- 社会的記憶の補充と創出
 ——異文化理解における人名の役割について …………… 潘 蕾(285)
- 《叶隠》中的君臣観
 ——与中国传统君臣観的比较 …………… 张玲玲(297)

日本社会研究

- 辛亥革命时期的日本对华认识研究
——新方法论的尝试 周维宏(307)
- 明治日本における「礼儀」への社会意識の変遷に関する研究
——礼儀作法書の出版動向に注目して 杨 柳(318)

2012 年度优秀硕士论文

- 日本語経験表現の両形式の異同
——「vたことがある」構文と経験の「vテイル」形 徐 媛(332)
- 日本語専攻の中国人大学生の自己調整学習の一考察
——言語学習方略と自己効力感および原因帰属の関連 李文鑫(351)
- 本居宣長の「物のあはれを知る」説
——その古代心性への追求 高 伟(375)
- 井伊直弼の茶の湯
——武士茶湯から「理想武士」の再構築 王 飞(392)
- 戦後日本の女性政治参加に関する考察
——女性国会議員を中心に 张雅妮(414)
- 『日本学研究』投稿規定 (445)
- 『日本学研究』執筆要領 (446)
- 《日本学研究》征稿启事 (448)
- 《日本学研究》撰稿规范 (449)
- あとがき (451)
- Contents (452)

間投助詞「ね」の待遇性に関する一考察

大连外国语学院 日本九州大学博士课程后期三年 颜晓冬

摘要:随着我国外语教学改革的深入,教学的重点从词汇、语法逐渐转移到交际、功能和运用上。外语教学已经不是单一的语言形式的教学,其目的在于培养和提高学习者对目的语的实际运用能力。因此,外语教学应该以语用知识的传授和语用能力的培养为核心和宗旨(冉永平 2006)。于是随着对日语实际应用的重视,终助词被越来越多的学者所关注。但是与之相比,日语的间投助词,比如“ね”“さ”的使用特点及现状却很少被提及。导致了很多的日语学习者不知如何正确的使用,误以为可以随意的增减,造成了很多实际应用上的不便。

为了解决日语教学中的这种尴尬,本文以间投助词“ね”为切入点,从谈话分析的角度,也就是结合实际的会话范例,围绕参加会话的人物年龄,性别,地位关系等,来具体的分析间投助词“ね”的使用特点,从而给日语学习者一个直观的认识,加强对日语的理解,进而弥补日语教材中存在的某些不足,让学生从全新的角度去接触并掌握日语。

キーワード: 間投 なわ張り フィラー ポライトネス理論

1. 序 論

実際の日本語日常会話の中で、助詞「ね」には発話文末に出現する終助詞用法だけではなく、発話文中において様々な要素に付加して出現する間投用法ではなく法もある。

(1)1TOM5: クレー射撃やっていますね。

2OM5: やっています。

(2)35TYM2: 俺でね、ええとね大体 50 回やってるんですよ。

36YM2: お～

37TYM2: で50 回やって、3ヶ月くらいか? それでね、始めたきっかけがね、

38YM2: はい。

(3)121TOF5: はぁ～、それ直すのも大変でしたね。

122OF5: いや、それがね、うちの夫がね、大変それが面白いって直してくれなかったんですね。

例(1)の終助詞「ね」は話し手が聞き手なわ張り内の情報を話題にしているときに使われたものである。神尾(1998)では、この類の「ね」は義務的であり、取り去るこ

とはできないと述べている。これは情報が聞き手のなわ張りに属するという制約下では、聞き手情報に配慮する必要があるためだと思われる。一方、例(2)、(3)のように(下線の)「ね」は発話文中に出現する場合、情報は話し手やまた聞き手のなわ張りに関連がないことが一般的であり、この「ね」を取り除いても発話機能に影響することはない。また、文中における出現位置も比較的自由であるとされている。

しかし、間投助詞「ね」の使用について考えるときに大切なのは、オプションルではない場合があるということである。つまり、間投助詞の「ね」はいつでも、誰に対しても、使っても良いわけではない。母語話者はその使い分けが自然に身に付いているが、非母語話者の日本語学習者に、間投助詞「ね」の使用制限をどう理解させるのが問題になる。しかし、この点に注目している研究は少ない。間投助詞「ね」に関する、従来の研究の多くは、間投助詞「さ」またフィラーと比較するものであり、待遇性から見たものが多くない。

そこで、本稿は間投助詞「ね」の談話機能を明らかにすると共に、その使い分けが談話参加者の上下関係、年代、性別によっていかに使い分けているかを考察する。

2. 先行研究

国立国語研究所(1951) 語勢を添える。または、単なる声のつなぎのために差し挟む。

(4)私ね、愛という言葉が空の星みたいなきれい事に思われて仕方がないのよ。

(5)今朝ね、あんたにお別れのつもりで、これ書いたのよ。 (pp. 54)

益岡・田窪(1992) 終助詞のうち、「ね」と「さ」は、文中の切れ目に挿入して、聞き手の注意を促す働きをする。これを、終助詞の「間投用法」と呼ぶ。

(6)最近ね、こんな表現がね、はやっているらしいよ。

丁寧な文体では、「さ」は使えない。また、丁寧体では、「ね」の代わりに「ですね」も用いられる。

(6')最近ですな、こんな表現がですな、はやっているらしいですよ。 (pp. 53)

伊豆原(1993) 「ね」も「よ」も間投用法がある。語末、句末など、文の途中に用いられる「ね」で、話し手が聞き手の受けを確認する形で話を進めている様子。

(7)回答者:……ところがね、ちょっといたずらの実験でね、水の中にちょっとね… (pp. 104)

宇佐美(1999) Brown & Levinsonのポライトネス理論によって「ね」の機能・用法を考察している。終助詞「ね」だけではなく、間投助詞「ね」も考察されている。

注意喚起

(8)でもねえ、九州もわたしね、長崎は一回行ったんだけど。

発話埋め合わせ

(9)あの一、いちおうですね、えー、まあ、それで会社のほうは今日から出社して動き出しております。(pp. 251)

日本語記述文法会編「現代日本語文法 第8部モダリティ」(2003)

終助詞の「ね」の用法を「話し手の認識として聞き手に示す用法」、「聞き手に確認を求める用法」、「聞き手を意識していることを示す用法」の三つに大別されるとし、それに加えて、間投的用法があるとしている。「ね」の「間投的な用法」に関しては、「間投的な「ね」は、話し手が聞き手を無視して一方的に話しているのではなく、聞き手を意識しながら話しているということを聞き手に示すものである」としている。(pp. 259)

以上取り上げた先行研究をまとめると、間投助詞「ね」に関して、国立国語研究所(1951)と益岡・田窪(1992)は、談話機能より「内在的意味」を重視し、意味論という角度から考察し、一方、伊豆原(1993)と宇佐美(1999)はコミュニケーションの観点から考察するという違いがある。そして、伊豆原(1993)は聞き手の取り込み度(聞き手をどのようなものとして捉えているか)に基づいて分析したが、宇佐美(1999)は「ディスコース・ポライトネス」理論によって考察しているということが分かった。また日本語記述文法会編(2003)では、対人的機能に着目して説明がなされておる。

3. 研究方法

3.1 研究データ

インタビュー番組「笑っていいとも」の談話資料を基本データとした。司会者タモリはゲスト20人との計300分の談話データを考察した。本稿で使用したデータはすべてお昼の番組「笑っていいとも」から取った談話データであるが、司会者タモリさんとゲストとの会話を基本データとする。この番組は平日の12時から、約15分程度のインタビュー番組である。基本的には、司会者とゲストの1対1の形で、インタビューを進めている。

今回の談話データは、相手となっている20人の対話者の性別、タモリとの年齢、社会的地位、上下関係は以下の4つのタイプに分けた。それぞれのタイプの談話が5人ずつの談話参加者がいる。つまり、タモリより年上の男性、女性各5人、タモリより年下の男性、女性各5人、計20人である。

3.2 考察対象

「間投」という言葉は、間に投げると直訳できる。具体的に言うと、発話する時に

文になっていないうち、間ができる時、その空間を埋め込んで、滑らかな表現にするために何か単語をつけるという意味であろう。本稿は伊豆原(1993)の定義を借りて、語末、句末など、文の途中に用いられる「ね」を「間投助詞の「ね」と呼び、本稿の考察対象とする。

しかし、「あのですね」、「そうですね」などのような、間投助詞「ね」に、より改まった場面でも使用できるように敬体「です」をつけて、「～ですね」という言語形式は、単なる丁寧度を高めるものではなく、話し言葉に特有の埋め合わせ表現(フィラーと類似する)の一部として使われることがほとんどである。そのゆえ、「～ですね」は間投助詞の「ね」と違う性質を持つ、一種の慣習化したものと思われる。

そして、小出(1983)によると、「そうですね」は話の丁寧度を上げるという役割を果たす言いよどみの一種である。また、宇佐美(1999)では、「～ですね」という言い方は既に「ね」抜きでは用いられない形で慣用化していると指摘している。以上の理由で本稿は「～ですね」を考察対象外とし、今後の課題の一つとする。

(10)57TYM4:他何があるの? 食べた事無い。俺大体塩が旨いんだけど、

58YM4:あのですね、基本的にまあマヨネーズ入れたりするちゃんこもあるんですよ。

(11)11TYM2:あ～、元々良い身体でしょ? そうでも無かった?

12YM2:そうですね、学生時代陸上やってたんで。

4. 考察

4.1 間投助詞「ね」の談話機能

本研究の目的は、従来間投助詞「さ」、またフィラーとの対比研究として間投助詞「ね」の談話機能を探求するものではなく、また、間投助詞「ね」の機能の分類を網羅することでもない。むしろ、実際の会話における、間投助詞「ね」を談話参加者によっていかに使い分けているかを明らかにすることが目的である。

本稿は間投助詞「ね」の談話機能を分析する際に、宇佐美(1999)の研究枠組みを借りて、談話レベルで、間投助詞「ね」の談話機能を次のようにまとめた。

①注意を促す——話し手を中心に

(12)94OM2:あの長生きした人でね、歩いて成功した人で###っていうのがね、

95TOM2:色々、色々ありがとうございます。

96OM2:どういたしまして。最近ね僕ねダジャレに凝ってるんですよ。

97TOM2:そうですね?

(13)157TYF3:水泳はね、やれるんですよ、水泳は。

158YF3:はい。

159TYF3:所がね俺クロールがね駄目なんですよ。

160YF3:息継ぎが難しい。

この「ね」の使用は、話し手が聞き手を自分の話題に引き込むために、自分の発話

を強調したり、相手の注意を促すものであり、聞き手が同じ情報を持っているかどうかという判断も必要ない。そういう意味で、話し手中心の用法と言える。間投助詞「ね」の中で、この類の「ね」の使用は一番典型的であると思われる。また、今回の談話データの中に、年上の人から年下の人に対して使ったのは、主にこの「ね」であり、年下の人から年上の人に対して、この「ね」の使用はあまり見られないようである。

②共感を示す——聞き手を中心に

(14)62OM3:本当に偉い方は、静かにしてらっしゃる。

63TOM3:絶対静かにしてますよ。

64OM3:うん。

65TOM3:ホントに偉い人はね、

66OM3:そうですね。

宇佐美(1999)では、Brown&Levinsonのポライトネス理論によって、場面ごとに間投助詞「ね」のコミュニケーション機能を注意喚起と発話埋め合わせのように二つに分けて考察した。しかし、間投助詞「ね」の使用は、場面だけではなく、談話参加者の社会的地位、年代によっても左右されるので、分析する必要がある。そこで、本稿は、宇佐美(1999)では、考慮を入れなかった年代差によって、間投助詞「ね」の使い分けを中心に考察を進めた。その分析の結果、間投助詞「ね」は、宇佐美(1999)の言う注意喚起と発話埋め合わせのほか、共感示すという談話機能も果たしているということが分かった。

上の談話例(14)に示されたように、このときの「ね」は、聞き手を自分の話題に引き込むために使われたものというより、むしろ聞き手の意見をフォローしたり、共感を示すといったもののほうが妥当であろう。そういう意味で、聞き手中心用法と言えるであろう。そして、今回の談話データの中に、年下の人から年上の人に対して発話した時に使われた間投助詞の「ね」は、主にこれである。

③発話を埋め合わせ——①から派生したもの

(15)126OF3:でも何か^ね、あのー私たちのグループではね、その麻雀のパイが、よく見えるように大きいんですって字が。パイは大きくないんだけど字が、

127TOF3:ほお～そうですか?

(16)78OM4:あれがちょっと^ね、あれですけど、まあしょうがないですね。

79TOM4:しょうがないですけどね。

80OM4:ええ。

81TOM4:元々私怪しげなんでね。

発話埋め合わせとは、話し手が、発話中に不確実な言葉表現のために言いよんだ時また、会話のギャップを埋めたりするために挿入される言葉(フィラー)に付随するものである。宇佐美(1999)では、この「ね」は、通常、「です」に付随して、「ですね」という埋め合わせ表現の一部として用いられ、単独で使われることはないと述べている。しかし、上記の談話例(15)(16)に見られるように、この「ね」は「です」に

付随せず、単独で使われることも可能である。この埋め合わせ表現における「ね」自体の機能は、「注意を促す」の機能から派生したものと考えられる。つまり、次の表現を計画する時間を稼ぎたい時、また言葉を選んで話す必要がある時などにおいて、発言の間を埋め合わせる機能を持つようになったと考えられる。この類の「ね」は相手の注意を喚起するという話し手中心用法の「注意を促す」の「ね」より婉曲的であり、発話を緩和するという働きがある。

ただし、ここで注目してもらいたいのは、この「ね」の前後に出現する言葉である。例(15)(16)から見ると、この発話を埋め合わせの「ね」は「何か」「あの一」「ちょっと」「あれですけど」などのような言語形式と共起しやすいようである。これらの言語形式は通常「フィラー」と呼ばれ、文中に比較的自由に挿入され得ることが特徴である。そういう意味で、この発話を埋め合わせの「ね」はフィラーと非常に似た傾向を示していると言ってもよいであろう。これは、また丸山(2002)のいう「間投用法のデスネはフィラーと極めて近い性質を備えている」という主張と一致したとも言える。

4.2 間投助詞「ね」の使用概況

まず、今回の談話資料中での間投助詞「ね」の使用概況を見てみよう。以下の表1のようになる。

表1 間投助詞「ね」の使用頻度・割合

		「ね」総数	間投助詞「ね」	
			頻度	割合
タイプ1	TOM	64	10	15%
	OM	112	67	60%
タイプ2	TOF	72	23	31%
	OF	125	60	48%
タイプ3	TYM	62	28	45%
	YM	71	3	4%
タイプ4	TYF	84	35	41%
	YF	75	3	4%
合 計		665	229	34%

表1に示されたように、年代ごとの間投用法の「ね」の総話数に占める割合は、平均34%となっており、現代日本語日常会話の中で、間投助詞の「ね」はかなり使用されているのが現状だと言えるであろう。

4.3 年代別による間投助詞「ね」

次に、間投助詞「ね」の使い分けの傾向を明らかにするために、年代ごとにその使用頻度と割合をまとめた結果を以下の表 2 に示す。

表 2 間投助詞「ね」の使用——年代差

		間投助詞「ね」		平均	
		頻度	割合	頻度	割合
O	OM	67	60%	63	54%
	OF	60	48%		
Y	YM	3	4%	3	4%
	YF	3	4%		

表 2 を見ると、「ね」の間投用法に関して、全体的には、年上の人では 54% を占めている一方、年下の人ではわずか 4% を占めているという結果がわかった。つまり、司会者タモリに対して、年上のゲストの間投助詞「ね」の使用は年下のゲストより圧倒的に多い。この結果からわかるように、間投助詞「ね」の使用が、相手の年齢、社会的な地位の違いに応じて、はっきりと使い分けられていることが言えるであろう。

<年上による間投助詞「ね」の談話例>

(17)24OM2: だからそれで喋るって事にはね相当慣れてると思いますし。

25TOM2: ええ。

26OM2: 私はねどこ行くにもね付き人とかマネージャー連れて歩かない。

27TOM2: 1 人で行くんですか?

(18)41OF2: やっぱり足腰はちょっとね、

42TOF2: あ〜。

43OF2: 疲れます。

44TOF2: それしょうがないですよ。

45OF2: そうですね〜。

46TOF2: それしょっちゅう使ってるから入るんですよ、セルフ、

47OF2: うん、まあね、皆さんねそうおっしゃるし、

上の談話例(17)(18)に示されたように、年上の人年下の人に対して使用した間投助詞「ね」はあまり使用制限が見られないうえ、1つの発話にも頻繁に現れるのが特徴である。この時、果たした談話機能は主に「注意を促す」である。

<年下による間投助詞「ね」の談話例>

(19)29TYM3: 入る? うわあ〜。

30YM3: 冷たいですね。

31TYM3: それでも面白い?

32YM3:そうですね、それくらいしか無いんでね、もう。

(20)93TYF3:どこが太ってるの?

94YF3:結構ね、

95TYF3:やっぱり「え～」て言いますよ、(観客を見渡して)見てたら。

96YF3:いやいや、ホント結構ね付くところには付いてないんですけどね、

例(19)(20)はいずれも年下の人が年上の人に対して、「注意を促す」という談話機能の間投助詞「ね」を使用した談話例である。このような「ね」の使用は、今回計5時間の談話データの中に、わずか7箇所しか現れていない。この結果は、前節で述べた「注意を促す」の間投助詞の「ね」は主に年上の人が年下の人に対して、使ったものである」という指摘を支持するとも言える。従来、多用すると、相手や時と場合によっては、失礼になってしまうと言われてきた「ね」は、主に「注意を促す」の「ね」であったと考えられてもいいであろう。それは、この「ね」が話し手中心の用法であるからであろう。

そして、この「ね」はBrown & Levinsonの言うFTA(Face Threatening Acts)にも密接に関わっている。つまり、適切な頻度であれば、ポライトネスを逸してはしないが、適切な頻度を越すと、FTA(Face Threatening Acts)の度合いが高くなり、失礼になると考えられる。

4.4 男女別による間投助詞「ね」

この節では間投助詞「ね」を性別によって、使用特徴を概観してみよう。その結果をまとめてみると、表3のようになる。

表3 間投助詞「ね」の使用——男女差

		間投助詞「ね」		平均	
		頻度	割合	頻度	割合
M	OM	67	60%	35	32%
	YM	3	4%		
F	OF	60	48%	32	26%
	YF	3	4%		

表3を概観すると、間投助詞「ね」の使用について、男性は32%、女性は26%を占めているという結果が分かった。つまり、男女の間投助詞「ね」の平均使用頻度・使用割合いずれについても、明確な男女差はここでは認められないようである。

4.5 同一話者による間投助詞の「ね」

最後に、同一話者による間投助詞「ね」の使用特徴を見てみよう。ここでは、同じ司会者タモリの間投助詞「ね」の使用頻度と割合をまとめて、次の表4になる。

表 4 間投助詞「ね」——Tタモリ

		間投助詞「ね」		平均	
		頻度	割合	頻度	割合
TO	TOM	10	15%	16	23%
	TOF	23	31%		
TY	TYM	28	45%	31	43%
	TYF	35	41%		

以上の表4から分かるように、タモリが間投助詞「ね」の使用は、年上のゲストに対して、平均23%を占めている一方、年下のゲストに対して、平均43%を占めている。つまり、タモリは自分より年下のゲストに対して、間投助詞「ね」の使用頻度は年上のゲストより約倍近く多いという結果が分かった。そして、自分より年下のゲストに使用した間投助詞「ね」の割合は助詞「ね」全体使用総数の約半分近くになる。この結果から分かるように、年齢やまた社会的地位など、自分より低い相手に対して、間投助詞「ね」の使用はかなり自由で、使用制限もあまり見られないようである。そして、間投助詞「ね」の使用が、同一話者によっても、相手の年代、社会的地位に応じて、はっきりと使い分けられていることが明らかになった。

<年上の人に対しての談話例>

(14)62OM3: 本当に偉い方は、静かにしてらっしゃる。

63TOM3: 絶対静かにしてますよ。

64OM3: うん。

65TOM3: ホントに偉い人はね、

66OM3: そうですね。

(21)60M3: ほっといたら年取っちゃったんです。

7TOM3: 昔からね、

8OM3: はい。

9TOM3: 「年取りたい、年取りたい」って言って

10OM3: そうなんです。

11TOM3: 60の時確かね、“60 良いですか?”60 早くなりたかった。

12OM3: なりたかった。

上の例(14)(21)から見られるように、タモリは年上のゲストに対して、間投助詞「ね」をかなり控えめに使っていることが分かった。そして、一回の発話に、頻繁に使うことも避けているようである。また、ここで、タモリは年上のゲストに対して使用した間投助詞「ね」のほとんどは、自分の発話を強調したり、聞き手を自分の話題に引き込むために使用したのではなく、相手の意見をフォローするという立場に立ち、親しみを示しながら、共感領域を作り出すことによって、インタビューをスムーズに進めようとするのであろう。つまり、ここで使われたのは「共感を示す」とい